

《研究ノート》

# Morphological, Anatomical and Statistical Analyses on The Four Ancient Mesopotamian Law Codes Including The Hammurabi Law Code:

—— (Part 0～Part VIII) の研究前史：

この一連の研究に至る道とその結果のあらまし ——

Kenji KAMIDE

## 1. 研究の動機

### 1.1 古代、先史メソポタミア文明に対する素朴な疑問

私（上出健二）は長年‘西洋経済史’の研究と講義を大学経済学部（と教育学部）と大学院において担当して来た。講義を年々重ねるにつれて科目名はそのまま‘西洋経済史’であったが、講義の内容を幅広く変容させて、現代社会につながる原点は何か？古代文明と‘先史’（表現は適切ではないが）文明とのつながり及び‘先史’文明の発生の要因についても言及する様になった。

自然科学者でもある私は以前から先史・古代に対して以下の様な幾つかの素朴で基本的な疑問を抱いて来た。その疑問（PQ）は列挙すると、（問題の提起）：

PQ（1） 石器時代（古代メソポタミアも一部含まれる）においては社会的、技術的に有意義な進歩は無く、その時代を通じて粗末なまま留まっていたのか？

石器時代と現代の社会・技術との間に関連はないか？

PQ (2) ヒトが狩猟・採集経済より農耕・牧畜経済へ移転した原因（動機づけ）はなにか？

再生産経済への転移の利点と欠点は？

PQ (3) 何故メソポタミア（特にシュメール）において最古の文明が興ったのか？

その後、エジプト、インド、中国でも古典文明の栄えた原因は何か？

PQ (4) 古代文明社会は本当に奴隷制先史社会だったのか？（誰が古代文明を作った？）。

PQ (5) ギリシャ・ローマ文明は古代メソポタミア・エジプト文明から何者も受容・学習しなかったのか？（更に言うと、クレタ文明は本当に原ヨーロッパ文明の原点なのか？）

PQ (6) 古代オリエン特社会は現代社会とは異質なもののか？

PQ (7) 古代の科学・技術は呪術的なものにすぎず、ギリシャにおいて科学が初めて生まれたのか？

である。しかるに、既刊の西洋経済史や経済史の専門書はこれ等の点に全く触れないか、根拠も示さずに従来 of ‘ヨーロッパ的’ 偏見？ (bias) (後述) を引用している。(本論文 Part 01 参照)。

## 1.2 参考論文<sup>1</sup>と参考論文<sup>2</sup>

上述のいくつかの疑問 (PQ) に対する解を求める試み (予備的、もしくは先駆的研究) を行った結果を参考論文<sup>1</sup>と参考論文<sup>2</sup>としてまとめた。

参考論文<sup>1</sup>は大学工学部同窓会における総会の特別講演「現代社会と技術の原点をたずねて—先史・古代文明社会の実像にせまる」の要旨

である。当然ながら聴衆は技術者や工学研究者が圧倒的多数であった。

この講演では、集学的な実証研究によって集積された科学知見を重視して、これらを基礎として先史・古代社会とその技術像を再構築し、これらが現代社会と技術にとって重要な原点であることを示した。この種の総合的アプローチは今までに取り上げてこなかったが重要な問題と私見する。

参考論文 2<sup>2</sup> は「現代社会と技術の原点としての『先史・古代文明社会の実像』にせまる」という題目の学術論文である。これは熊本大学（教育学部の卒論生と院生）および奈良産業大学（経済学部の 3, 4 年生と卒研生）における講義録と卒研生と院生のゼミ資料を基礎としている。

この論文でも小さな、しかし信頼度の高いと思われる小事実を積み重ね（ここまでは、参考論文 1 と同じ）、さらにいくつかの根源的 1 次資料を系統的に解析すること（ただし、資料の選択や解析法は未だ未熟である）によって問題点（前述）の全体像を明確にする 1 つの試みである。

上記の 2 つの参考論文<sup>12</sup>（先駆研究）の内容（タイトル）を表 1 にまとめて示す

表1 参考論文（先駆研究）の内容

参考論文1	参考論文2
1.1 古代西洋史について いくつかの疑問	2.1 はしがき : 古代メソポタミアはヨーロッパ人によってどの様に評価されていた？ (PQ5 と 6,7 (日本高校教科書、欧州共通教科書、アメリカ大学における経済史テキスト)
1.2 ヒトの進化と化石時代(PQ1)	2.2 ヒトの進化と化石時代(PQ1) (ヒトの進化; 技術進歩)
1.3 農耕と牧畜 (PQ2) (地球温暖化: 乾燥化、栽培化の条件)	2.3 農耕・牧畜のはじまり (PQ2) (狩猟・採集経済→農耕・牧畜経済への転換; メソポタミアにおける遺跡群)
1.4 原初農業の伝搬・移転と技術進化の誘因 (人口増、天水農業適地の不足)	2.4 原初農業の伝搬・移転と技術進化の誘因 (乾地天水農業の拡散と行きづまり; 灌漑農業への転移)
1.5 シュメール文明へ : 世界最古の文明の誕生[大規模灌漑農業、生産性、負の効果(塩化、生産余剰→高度文明)]	2.5 シュメール (メソポタミア文明) へ (大規模灌漑農業の発達: 農業技術、生産性、負の効果(塩化)、大きな生産余剰とその結果としての高度専門職業(技術・管理)の発生
1.6 シュメール文明の本質 (PQ 3,4) (制度としての奴隷制、軍隊組織・訓練; 交易: 貨幣; 金利; 契約; 裁判(家庭生活); 法の観念と成文法典: 裁判と人権)	2.6 シュメール文明の本質 (PQ3,4) (法の概念と成文法典: 司法制度; 製造物責任と医療過誤; 被災者・不運な小売業者の救済: 古代文明社会は法治国家なのか?: 家庭・個人の権利 [一般市民の私有財産権、相続と譲渡、女性の法的地位、社会的弱者の救済、公的賠償]
1.9 古代オリエント文明の科学と技術 (PQ7) (科学と技術の本質: 天文学: 数学; 医学; 測量; 技術と地図; 暦; 冶金、繊維)	2.7 文字と教育 (文字の出現、学校) 2.8 ギリシャ、ローマへの古代オリエント文明の影響 (PQ 5) 2.9 現代社会に生きる古代文明 (PQ6) 2.10 古代オリエント文明の科学と技術 (PQ 7) (科学と技術の本質: 天文学: 数学; 医学; 測量技術と地図; 暦: エジブと太陰太陽暦: 冶金; 科学産業: 繊維
2.11 結論 (この話のまとめ)	2.11 結論

参考論文 1 と 2 によって 1.1 の疑問はどの程度解明されたかをまとめると以下の表 2 の様になる。

表 2 解明された事柄

PQNo.	参考論文 1	参考論文 2	註
1	◎	◎	石器時代にも大きな技術上の進歩があった
2	○	○	地球の温暖化と乾燥化
3	○	○	栽培に適した植物（麦）の自然天水農業より灌漑農業への脱出
4	○	○	奴隷社会ではない 生産人口は圧倒的に自由農民
5	◎	◎	ギリシャ・ローマ文明の精華と言われるピタゴラスの定理は何百年も以前にメソポタミアにおいて見出だされ、広く活用。多くのメソポタミアの科学がギリシャ・ローマへ移転
6	○	◎	古代の科学・技術も合理的なもので近代と全く同質であり異質なものではない
7	○	◎	古代の科学・技術は呪術と全く関係ない（日食、月蝕の正確な予知も可能）

結局、PQ1, PQ5 および PQ6, PQ7 は参考論文に示す証拠によって解決された。やや詳細な補足説明を参考論文 1, 2 より引用する。

#### PQ1 : 石器時代（石器時代は原始時代か？）

例えば、石器時代（250 万年～1 万年前）における技術進歩を整理すると、

- (a) 汎用型（多目的型）→特殊型（用途別へ）
- (b) 大型→小型へ
- (c) 重量品→軽量品へ
- (d) 一体物→部品組み立て式（異素材の組み合わせ→部品の共通化）

- (e) 完成品（中間製品）の共通化（工程の途中から用途別へ）
- (f) 仕上げ（粗→密へ）
- (g) 道具を作るための道具（石器）の開発

となる（参考論文 1（Ⅱ）, 参考論文 2）

石器製造技術の進歩の結果、生産性も 100 倍（表 1）向上した（詳細は本文）。

一方、従来の説では石器時代は次の様に説明されている。「人類の誕生は仮に 60 万年前としても、実に 59 万年間は旧石器時代の蒙昧な時期で、わずか 1 万年の間に急激に人類文化は進歩し、・・・、それは長生夢死の生活を重ねてきた人類が・・・」（杉 勇：岩波歴史 1 古代 1、p 6（1969）<sup>3)</sup>）。

これが一般的見解であるが明らかな誤りである。正しくは“石器時代は原始時代ではなく石を素材とし、その素材の限界内で最も高度に発展した社会である”と理解すべきである 1,2。

参考論文 1<sup>1</sup>（Ⅱ）, 参考論文 2<sup>2</sup>（表 1、表 2）

なお、1964 年に富村伝（大阪市立大学出身）は「原始時代後期の文化は獲得経済の枠内で、最高度に発達した文化である」と述べた（ただし、これ以上の議論や証拠はないが）。

この様に PQ1 は参考論文 1,2 で完全に否定された。

#### PQ4：シュメール文明の本質（法概念と成文法典）

4 つの法典（ウル・ナンム、リピト・イシュタール、エシュヌナ、ハンムラビ法典）間の相互関係；社会階層（階層分化の歴史（検討不十分））；奴隷（検討不十分）；司法制度、裁判、証言、証人、証拠；結果責任（製造物責任と医療過誤）；家庭と個人の権利、私有財産権（所有権）、相続と譲渡；女性の法的地位（社会的弱者救済）；通貨、物価（公定価格）、

利子、賃金についても言及した。<sup>12</sup>

#### PQ6：現代社会に生きる古代文明；現代と古代

連続性を示す証拠（22 の項目のみ列挙）、参考論文 2<sup>2</sup>（Ⅷ）

#### PQ7：古代オリエント文明の科学と技術；科学と技術の本質

科学とは自然観察（または、実験）して得た結果から共通する性質を見出し、更にこれ等を合理的思考によって抽象化して理論（科学的理論）を作る。この理論に基づく予測が正しいかどうかを実際に（自然観察または実験）によって検証する。このサイクルを必要な回数繰り返す。このようにして研究対象に対する「科学」が作られる。一方、技術は先程の共通性質の集積（know-how）である。（図 1 参照）<sup>2</sup>。

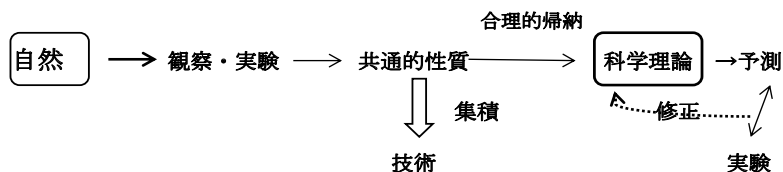


図 1 科学と技術の本質

科学も技術も共に再現性を持ち、積み重ねの出来る知的体系である。単なる抽象的思弁は本当の科学ではない。天文学の分野で例を上げると、一年の長さの決定、閏年の発見など当時の天文学はまさに、現代の天文学の祖先である。一年の長さ（日数）や、閏年の存在は、長年（一千年以上）に亘る星座の運行観測の毎日の記録とそれに基づく正確な計算によって決定された（神の偶然の気紛れなどでは全くない）。日食、月食の正確な予知も可能であった。これ等も呪術などは全く無関係である。（PQ7）

数学も古代メソポタミアでは九九、分数、平方根、立方根、円周率などに加えて高度な数学理論が発達した。

古代メソポタミアの‘科学’は「実用の学問」(にすぎない)という日本の世界史教科書や「古代オリエントには科学は存在しない」とするヨーロッパの主張がある。一方、ピタゴラス Pythagoras の定理は「ヨーロッパ科学の代表的精華の一つである」と現在でも主張されている。しかし、実はピタゴラスの 500 年以上前から「この定理」はメソポタミアで広く知られていた具体的な証拠がいくつもある。(参考文献で 1 (1× (3)) 参照)。

この様に PQ7 は参考文献 1, 2 において完全に否定された。

‘Pythagoras’ の定理が現代社会に定着し、受容されている事実は皮肉なことにそのまま PQ6 を支持する証拠である。

また、修正を許さない(神聖な)理論は単なるドグマ(神のお告げと同質)に過ぎない点にも留意すべきである。完全で非の打ちどころのない(perfect and no flaw)科学的理論は正に anti-scientific である。

(参考までに)

ロシア生まれのユダヤ人でアメリカで著名なシュメール学の学者 Samuel Noth Kramer は彼の著書「In the world of Summer」(1988)<sup>4</sup> (p163) の中で、1955 年に東ドイツの Jena に滞在時、the teachings of Marx and Engels as gospel, to be taught as absolute dogma. . . there was no need to search for social and philosophical truths, . . . と述べている。

彼は Ur-Nammu (U-N) 法典を初めて翻訳、紹介した人物で、その彼も U-N 法典に関する多くの研究業績を持つ。(上記の本の p239-240 や発表論文リスト article の No.66 など)。また、著書 The Sumerians ; Their History, Culture, and Character' 1963 (全 355 頁)<sup>5</sup> もよく知られている。



参考論文 1 および 2 において以下の様に結論した。

- (1) 社会や技術の歴史は地球環境の変化に対するプラスまたはマイナスの適応の結果である。
- (2) 社会と技術は先史、古代からずっと連続的に変化・発展してきた。
- (3) 古代文明の発生の原点は主要産業（農業）の生んだ大きな持続的余剰であり、大規模灌漑による高生産性農業がこの条件を満足した。
- (4) 農業に好適でもない地域において乾地天水農業が誕生発生した。その後、人口増加の圧力により結果的に（3）の条件を満足する地域（シュメール）に移動した。
- (5) 「先史・古代を遅れた社会と見做すのは無知そのものである（付言、参照）」先史・古代の知恵の多くが現代社会の基本システムとして生きている。
- (6) 先史・古代の科学と技術は「現代科学」と本質的に何の違いもない。逆に「古代の科学」のあまたの精華が「現代」に生きている（途中の挫折が有ったにしろ）。
- (7) 科学の誕生の動機は当たり前ながら、実用上の必要性である。

参考論文 1 では紙数の制限上、文献、図、表を一切使用していない。

なお参考文献 2 は、広い分野にまたがる（文学、法学（含、実務家）、法制史、経済学、経済史学、歴史学、数学、家政学、女性学、生物学、技術、人権論、・・・）研究者（主として国立大（名誉）教授（かつての教え子も含む）の査読を受けている。

参考論文 2 でも新しい視点の重要性（例、比較法制史的検討）を指摘した段階に留まっいて、原資料の選択の厳密さは未検討のままで、対象をやや厳密さに欠ける方法で解析している。研究対象がやや広すぎるた

め焦点が十分に絞られていないことは自明である。他者の説の引用もの  
仕方も含めて客観的証拠 (fact-finding) の提示も十分とは言えない。結  
局、上記の参考論文 1, 2 は「本研究」に至る準備的なものであるが、  
これ等の研究無しには「本研究」は達成できなかった。

本研究は参考論文 2 の手法より狭い分野 (法制) に限定して研究の質  
(厳密さ、正確さと信頼性) を向上、発展させたものである。

### 3. 古代メソポタミア法典についての今までの研究

永年 Hammurabi 初め Ur-Nammu, Lipit-Ishtar, および Eshnunna な  
どの先行法典についての研究資料 (特に Hammurabi 法典についての) は  
多数見当たるから、この分野の研究はすでに終わっているような印象を  
受ける。詳しく過去の文献を検証すると (本研究 Part 0 を参照)、極めて  
少数の条文についての表面的解説のみが多く、例外は D.R.Driver と  
J.C.Miles の共著である。(1952 年 (第 1 巻)、1955 年 (第 2 巻))。これ  
等も非常に書誌学的なものである。その後、T.H.Roth (1977 年)、O.  
Iijima (飯嶋紀) (2002 年)、と M.Van De Mieroop (2004 年) も読解可  
能な全条文 (Hammurabi 法典) の翻訳 (飯嶋以外は英文訳) に成功し  
ている。しかしながら、今までの研究では決して英文 (または、日本語)  
の訳文以上の突っ込んだ解析は行われていない (後述)。

結局、世界の多くの人達は Hammurabi の名前だけは知っているにも  
拘らず、その内容は「目には目を」という条文だけから H 法典を、残  
酷で野蛮な法律であると理解しているように見える。今迄の研究だけか  
らこの結論を出すのは大きな疑問が残る。

(Journal of Social Science, Nara Gakuen Univ., vol18, p71-108 (2017)  
参照)。

## 4. 本研究の目的

前述の Part 0 の結果をふまえると、本研究の目的は以下のようにまとめられる。

1. 古代メソポタミアの4つの法典（Ur-Nammu、Lipit-Ishtar、Eshnunna と Hammurabi 法典）の読解可能は全条文を根源資料（data base）とする。その資料を解析（科学的な analysis）することによって当時（上記法典の制定、発布、有効に機能をした当時）のメソポタミアの法体系を明らかにする。ここでは解析（Analysis）は条文の単なる翻訳（translation）や解説（解釈）（interpretation）ではない。
2. 上記の法典の解析を通じて、当時の社会の地域、時代の相違性も考慮しての実像にせまる。
  - 2.1. 当時の社会の発達（例えば、社会の階層、職業の多様化）は法体系にどのような影響を与えたか？
  - 2.2 特に、成文法は社会のいかなる発達段階において成立したのか？
  - 2.3 これ等の成文法は一般人にとっては無縁であって、支配階級（例えばあるとしても）の独占物であったのか？
  - 2.4 上述の法典は一体だれ（どの社会の階層）を相手に発布されたのか？
  - 2.5 発布者（支配者）の力を誇示して人民は発布者の命令に従うことを要求しているか？それとも逆の立場なのか？すなわち、自分（発布者）は如何に一般大衆を幸せにしている（役立っている）かを、例示したものか？現代の政治家（たとえ強権国の首長でも）を想像させるものか？
3. 上記の4つの法典の相互関係を調べ、比較法制史的視点から Hammurabi 法典と他の3つの先行法典との関係性を明らかにする。
  - 3.1 Hammurabi 法典は先行法典を単に集めたものか？

- 3.2 Hammurabi 法典以前の社会慣習を法典化したものか?
- 3.3 Hammurabi 法典は以前の法典とは大きく異なるものか?
- 4. 4つの法典がカバーする category は?
  - 4.1 カバーする category は時代と共に変化した?
  - 4.2 Hammurabi 法典は極めて広い category をカバーしているか?
- 5. 古代メソポタミア法体系と現代の法体系とのつながりの存在の有無とその種類を明確にする。

## 5. 本研究の方法論

- 1. 根源資料として Hammurabi (H) 法典およびそれより古いすべての法典 (Ur-Nammu (UN)、Lipit-Ishtar (LI)、および Eshnunna (E) の3法典) を採用する。
- 2. 素性の明らかな (例えば、Louvre ルーブル美術館所蔵の stela に刻まれた Hammurabi 法典) 上記の法典で読解可能な cuneiform で書かれた script (ideogram (表意式) cuneiform script) を写真コピーする。この (photographed ideogram cuneiform) を phonogram cuneiform (表音式 cuneiform) に変換 (transliteration) する。次いで、これを Sumer 語 (Ur-Nammu と Lipit-Ishtar 法典) または Akkad 語 (Eshnunna と Hammurabi 法典) の条文に書き直す。
- 3. 上記の Sumer 語または Akkad 語の条文の一字一句を逐語的に翻訳する。勿論英文に翻訳することも可能である。

LI, E と H の日本語については既に飯嶋の優れた業績がある<sup>6</sup>。また UN の日本語については小林の仕事がある<sup>7</sup>。これ等を本研究の出發資料 (data base) とした。条文の英文化は本研究で行った。英文訳 (飯嶋ベース、上出) の信頼性は一部の条文について英文化された Van de Mieroop の仕事<sup>8</sup> (これに小林の仕事の数年後に発表された) と比較することによって確認した (上出)。

4. これらの日本文の条文をその後の系統的で科学的な解析、例えば形態学的（大きさ一条文数等）、解剖学的（内部構造）、かつ統計学的（出現頻度など）解析に利用した。信頼性の高い根源資料をきちんとした科学的手段で徹底的に解析すれば、真実が見えてくるであろうというのが科学者である私の発想の原点である。

図 2 に根源資料の処理のプロセスを示す

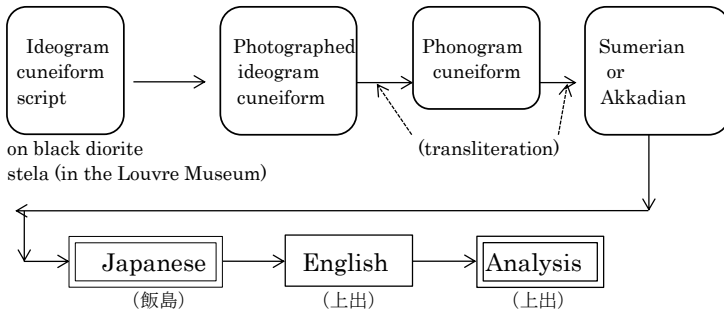


図 2 根源資料の処理

5. 本研究によって得られた知見は、必ず「客観的証拠に基づく」ものに限定する。また「証拠に基づく議論」を重視する。
6. 得られた法令の解析結果を当時の社会的知見と対比させる。

## 6. この研究で得られた結果

### 6.1. 研究成果；論文リスト

得られた研究結果を論文集 Part0~Part VIIIとしてまとめた。

題目 Four Ancient Mesopotamian Law Codes Including The Hammurabi Law Codes ;Morphological, Anatomical and Statistical Analysis

(原題目) Morphological, Anatomical and Statistical Analyses on  
the Four Ancient Mesopotamian Law Codes Including  
The Hammurabi Law Codes :

Part 0 : Introductory Remarks ; 社会科学雑誌、第 18 巻 p49-86, 2017  
年 9 月.<sup>9</sup>

Part I : Survey of Size, Contents, and Transfer ; 社会科学雑誌、第  
11 巻 p113-145, 2014 年 12 月.<sup>10</sup>

Part II : Social Class and Development of Professions; 社会科学雑誌、  
第 12 巻 p107-148 , 2015 年 6 月.<sup>11</sup>

Part Ⅲ : Legal Litigation ,Penal Law Code, and Civil Law Code, 社会  
科学雑誌、第 13 巻 p215-283, 2015 年 12 月.<sup>12</sup>

Part IV : The Written Contents and The Commercial Laws; 社会科  
学雑誌、第 14 巻 p251-302, 2017 年 6 月.<sup>13</sup>

Part V : Analysis on the Fundamental Data Base of Prehistoric  
Mesopotamian Sites; 社会科学雑誌、第 16 巻 p97-159, 2016  
年 12 月.<sup>14</sup>

Part VI : Agricultural Law, and Law of Retaliation ; 社会科学雑誌、  
第 17 巻 p119-195, 2017 年 3 月.<sup>15</sup>

Part Ⅶ : Overall Summarization of the Study: Solved and Unsolved  
Problems; 社会科学雑誌、第 19 巻 , p37-95, 2018 年 9 月.<sup>16</sup>

Part Ⅷ : Japanese Collection of Fact-Findings in the Previous  
Studies, 社会科学雑誌、第 21 巻 , p1-46, 2019 年 3 月.<sup>17</sup>

図 2 の解析 (analysis) の適用例を表 2-1 ～表 2-3 にまとめて示す。

表 2-1

## 法典の解析例

解析例	得られた知見(結果)
1.読解可能な全条文数 (PI) *	法典のサイズ (読解可能な論文の決定法)
2.カテゴリー数 (PI)	法典のカバーする領域 (カテゴリーの分類法)
3. 4 法典間の類縁 (PI)	先行 3 法典の H-Law への影響: 条文の移転の程度 (類縁性の決定法)
4.法典の前文 対象者 (PI)	awilum が対象 (II.3.3.2) (awilum を含む条文の数)
5.法典の前文に出てくる都市名 (PI)	法典の施行された地域
6.比較法制史的解析	4 法典間の比較と 4 法典と現代法典の関係
7.法典に出てくる社会、階層 (PI) : (種類の数) (種類の出現頻度) (階層の職業)	古代メソポタミアの社会階層
8. 4 法典ごとに出現した職業名 (PI)	職業の分化の歴史
9.各社会階層の機能	a. 王、awilum (Iu <sub>2</sub> と awilum) b. awilum と mushkenum の法的地位と両者の比較 (含、罪と罰) c. 奴隷の法的地位
10. 法廷、裁判に用いられた用語 (PIII) (TableIII-7)	訴訟、判事*、原告、証拠(testimony)*、 証拠 (evidence) *、捺印証書、証人、契約書などの用語は現在でも使用 (*: 歴史上最初に出現)
11.ハンムラビ法典の原則 (PIII.5.1)	証拠主義 (現代法の起源)
12.ハンムラビ法典と神裁 (PIII.4.3)	例外として認める例が一つ (証拠がないのに犯行が行われている時「川の神」の判決・・・H2)
13.裁判の手続き	FigIII-2 告訴(判事調査)→受理→原告 (証拠、証人) → ↓ 却下 被告 (証拠、証人) → 法廷→判決→法の執行
14.判事の仕事	現代の判事の業務と非常に類似(PIII.5.2.2)
15.duble jeopardy(二重判決)の禁止(PIII.5.2.2)	H5. 現代法の基本原則の一つ (日本国憲法、第 39 条)
16.刑罰の種類	4 つ、現在の懲役、禁固刑はない
17.ハンムラビ法典は 4 法典 の中で一番過酷な法典?	TableIII-10 ; UN が一番過酷、ハンムラビ法典は、ずっと過酷さは低い
18.ハンムラビ法典と日本刑法とを比較すると (死刑になる犯罪) (PIII.p258)	ハンムラビ法典は日本刑法よりも厳しい

\*: Part I

表 2-2 法典の解析例

解析例	得られた知見(結果)
19. 古代メソポタミアの 4 つの法典は報復法か?	・Table III-12: 報復法は H 法のみ ・H 法では加害者、被害者ともに awilum 階級の場合のみ適用。被害が頬の場合は報復法は適用されない。更に適用例外もある (Table III-14)
20. 「神前で・・・」という句を含む条文	裁判の行われた場所を神殿と推定できる例。H20、H23、H103、H106、H107、H120、H126、H131、H206、H207、H227、H249、H266、H281 (Table III-6)
21. 宣誓	証人が証言をする前に行うもの→現在でも (これだけの記述では場所の規定できない)
22. 復讐法 (つづき)	product liability にも適用された (Table III-18) (H229-H231)
23. 医療過誤	一種の犯罪とみなされた。人権が法的に公認された最初の例である (H218)
24. 正式な結婚の手続きの歴史 (4 法典の比較)	(Table III-22) ハンムラビ法典では書面による誓い (oath) が必要 (H128)
25. 正妻を離婚 (H 法典)  H 法典では妻からの離婚も申し立て可能	・裁判所の正式の許可を要す (この場合、正当な理由を必要とする (Table III-24))。 ・離婚慰謝料を要す (Table III-25) 裁判所が調査の上許可する (Table III-25 の Reason 3)
26. 家族構成のタイプ (4 津の法典)	UN(3 つ)、LI (4 つ)、E(1 つ)、H(14 その内、タイプ 1 (3 つ)、タイプ 2 (3 つ)、タイプ 4 (3 つ)、タイプ 5 (3 つ)) ・家族構成と農業 (灌漑農業) 最高の経営効率を上げる家族構成
27. 相続権	子供と妻
28. 相続財産比率	均等分割相続(H165)、但し、長子相続 (primogeniture) の例外 (父の長子を特に気に入っていた場合) (H165) もあり得る: 長男への贈与分の残りはゼロではない
29. 妻への生前贈与 (gift inter vivos)	H152, 家族経営における妻への協力感謝 娘は結婚時の持参金が相続財産に相当する (H183) (持参金を持たせないうちに父が死亡した時は未婚の娘(尼も含む)の取り扱いも規定——男子の 1/3 (H181))
30. 古代バビロニア時代の一般人が一生涯に作った代表的な契約	Table IV-1: 売買、小作、結婚、借金 (商人)、領収書、信託、結納、生前贈与、奴隷の生んだ自分のこの認知など
31. 売買契約 (不動産、農地、土地、家屋) の自由	H40 (尼僧 (lukur)、商人 (tamkaarum)、企業家 (ilkum)): たてまえ主義(原則)とその例外 (H37, H38) と例外の例外 (H39, H41)
32. 小作契約	有効性、保管義務



表 2 - 3 法典の解析例

解析例	得られた知見(結果)
33.通貨としての大麦と銀の 4 法典における出現頻度	TableIV-6 ; 銀が大麦より早期 (UN,LI) に出現
34.通貨としての銀、大麦の使 用カテゴリー (4 法典)	銀は広い分野に早くから利用された (TableIV-7) . 大麦は主として農業分野のみに利用された (TableIV-8).ハンムラビ時代には大麦は単に銀の補助通貨になった.
35.E 法典と H 法典から見た 給与	年俸、月給、日給 (TableIV-9、IV-9 (続)) . 成功報酬としての職人 (家、船建造、建築) の給与と 医師の収入 (外科医と内科医、外科手術の失敗) E 法典と H 法典における給与の比較 (TableIV-10) . 年単位の常雇の農夫は年俸 (大麦) 支給、一方収穫時 のパートの農夫の給与 (銀または大豆) は常雇の 2 倍
36.商人と地主の役割	Chart VI-1
37.農業と商業の関係	Chart VI-2
38.H 法典における商人に関 する条文数	22 条文、vansam(1)、売買 ; 対農夫(4) ; 対セールスマン(7) ; 対運送業者(1)、金貸(1)、人質(5)、信託(2)
39.商人の機能	財政金融、家族への金貸し(H152)、事業への融資 (H48-51)、事業への金融、貿易事業への投資 (H100-H107),遠距離貿易(損益)
40.商人と農民との間の契約違反	Table VI-12 に 4 つの case
41.乾地天水農業より運河 (水 路) を利用した灌漑農業へ の転換経路	ChartVI-1
42.灌漑農業と天水農業の比 較 ; 利点と欠点	Table VI-1
43.大麦の生産性の目安とし ての生産量/種の比	Table VI-2、BC6000 年～現代まで
44.農業による灌漑の役割	ChartVI-2
45.王室における大規模直営式 農業より小作農業への転換	ChartVI-3
46.耕作技術 (冬単作→夏、冬 2 耗作へ)	① 原因 ; 灌漑農業の導入による生産方式の変換 (小 規 模 → 家族単位 → 耕作法 ②農民は給与所得者より経営者としての小作農へ ③小作農の経営 (責任)
47.灌漑農業の重大な失点 大規模環境汚染	塩害 ; 現象 (TableVI-5) と発生機構 : 小麦→大麦への転 換
48.高価な灌漑水利用の農業 とそれが不要の従来の乾 地農業とどちらが小作農 にとって経済的に有利か	前者が後者より何倍も借地農にとって有利 (計算例)

### 6.3 本研究において提案された説

1. law の発生の様式 (FF1-6,1-7)
2. 小さな遺跡→巨大遺跡への成長のメカニズム (V -4.1.4 (d))
3. Hammurabi 法典より見えてくる社会のモデル (マルクス・エンゲルス説の否定)
4. 各種職業の発生 (Table II -13a~Table II 13b)
5. 職業の発達の経路 (pass) (Table II -14)
6. 法概念の発現 (Step (1) → Step (7) (III -3.1))
7. written law の発生 (Table III -1) .
8. 起訴と訴追のプロセス (Fig. III -2)
9. 結婚の取り決め (手順) (Table III -21)
10. 商人と地主の役割 (Chart IV -1)
11. 農業と商業 (Chart IV -2)
12. 灌漑農業の発展の経緯 (IV -3.1.1)
13. 灌漑農業の果たした役割 (Chart VI -2)
14. 大規模・直営式農業 (王室経営) より小規模借地農業 (家族経営) への転換 (Chart VI -2)
15. 荒地の開墾と果樹園への椰子の植林 (Chart VI -6)

### 6.4 本研究によって明らかになった Hammurabi 法典

1. H law は過去の習慣を単純に法令化したものだけではない (III -4.5.1)
2. H Law はむしろ過去の慣習を否定もしくは改良したもの (III -4.5.1)
3. H law は UN, LI, E-law の条文を集めたものではない (Table I-5)
4. 上記の UN, LI, E-law の一部分は H law に採用されたが、その部分は H law のほんの小さな一部分にすぎない (III -4.5.2)
5. すべての H law の条文は完全にお互いに consistent であるわけではない。

6. 以下の 3 つの例は不整合を示す（Ⅲ -4.5.3）

証拠 1:H8 と H6： 証拠 2：H42 と H149：証拠 3：Table Ⅲ -9

7. 法体系が超長期間にわたって現在に至るまで連続性を保っている事実は H law の重要な特性である（Ⅲ -4.4.2）

8. H law の法概念は人類に共通の法概念であることを示す

- （1）法治
- （2）基本的人権
- （3）社会的弱者の救済
- （4）責任（過誤の補償）

6.5 その結果から見てきた古バビロニアの実像（例）

解析の結果は驚くべきもので、古代 Mesopotamia の法体系と日本を含めた現代の先進国のそれ等との間につながりが見いだされた。

以下にいくつかの例を示す。

6.5.1 法の支配（Law-abiding state）

裁判（Part Ⅲ、5.1~5.2）：すでに 3,800 ~ 3,900 年以前（Hammurabi）に、法に基づく裁判が公開の原則の下に開かれ、裁判官が取り仕切った。裁判官の任務が規定された。Double jeopardy は禁止された。偽証（perjury）も罰せられた。3,800 年以前すでに、suit, judge, plaintiff, testimony, deed, witness, clay plate（document）などの述語が Hammurabi 法典中に見いだされる。Divine judge は原則的には行われず、すべての判決は証拠に基づいた。（例外、H2, H132 のみ）。法廷では宣誓（oath）が行われた。これらは現在の法廷でも行われている。

6.5.2 社会福祉（Social welfare）

社会的弱者（犯罪被害者）（Part Ⅲ、4.4.1 や malpractice（医療過誤）（Part Ⅲ、6.5、Table Ⅲ -18）や製造物責任（Part Ⅲ 4.4、Table Ⅲ

-19) など非常に先進的な(場合によっては現代社会より更に進んだ)  
思想が見いだされる。

### 6.5.3 奴隷の権利 (Human rights of slave)

奴隷もいくつかの権利を持っていた。(アメリカの黒人とは全く違います) (Part Ⅱ、3、5、6)。例えば財産(家など)の売買、結婚(一般市民とも結婚可)、相続権、医療の治療を受ける権利など。認知された奴隷の子は、父の財産の平等な相続意見を持ち、認知されていなくても父の死後には母子ともに自由化(解放)された。

### 6.5.4 女性の地位 (Legal state of women)

女性の地位も高かった。

結婚に際して、署名した宣誓書を作成して、裁判所に提出した。正妻が子供を産めない場合(元尼僧)で正妻が同意すれば、法的に夫は女性奴隷を持つことを認められた (Table Ⅲ -22)。同棲は正式には結婚とは認められなかった。

財産: 夫の死後、妻は子供と同等の相続権がある。(中世、近世のイギリス人女性の法的地位の低さと比較すると面白い)。夫を嫌がって離別する権利も認められた。(ただし、裁判所(簡易)の許可が必要) 家庭は一夫一婦と彼らの子供が原則。離婚時の慰謝料も規定されていた (Table Ⅲ -25)。

## 6.6 古代 Mesopotamia 社会に対する従来の理解の誤り

Mesopotamia 文明を蔑視して難癖をつけたりする西欧やその追従者? (日本も) 等などの「Mesopotamia の異端説」の誤りが実証された。  
このような「誤り」の原点はマルクスとエンゲルス (Karl Marx と Friedrich Engels (ME) の間の書簡 (1850 年ごろ)) にある。すなわち、彼らは確実な根拠もなしに「経済・社会は常に進歩すると誤解し」(進歩経済学)、遊牧～初期天水乾地農業段階にあった「旧約聖書」の時代

よりもさらに 800 ～ 1,000 年も古い「Mesopotamia 文明 (Old Babylonian dynasty I period)」を旧約の世界よりも当然未熟社会と誤って想像し、Mesopotamia 文明を「絶対権力を持つ支配者」と「多数の全く人権を持たぬ奴隷」との二つの階層から構成された社会と断定した。多数の人民は土地の所有権を持たぬと ME は述べている。

Part III .4.4.2において一般人 (awilum) は誰でも生存権、所有権、相続権、告訴権、などの権利を平等に持つこと、および契約の権利が法によって保障されていたことが示された。(3. (本研究ノート) の推論の根拠が完全に否定されたわけです)。事実、数多くの契約文書が一般の家跡から見いだされた。各種の契約の多くの例が Part IV、3.2.2.A, B, C にも例示されている。不動産の登記所もあった。

#### 6.7 「目には目を」は残酷か？

「目には目を」は果たして残酷かの考察も行った (Part VI、4.3)。社会の複雑化に伴う貧富の格差の拡大の結果、すべてをお金で決着をつけるという従来の法 (Hammurabi 以前の) では反って社会の不公平を生じてしまうので、富者にも同じ痛みを感じさせる方が社会的公平を保つのに必要だったというのは私の見解である (Part VI、4.2)。またこの法律は加害者、被害者ともに一般自由民 awilum の場合のみに適用されることに注目すべきである。さらに、キリストのいう「目には目を」(新約) は「旧約 (Part VI -12)」のことであって、キリスト自身は当時「旧約」よりも古い (800 ～ 1,000 年) Hammurabi law の存在を知る由もない。(Matthew 5 : 38 参照)

(補足) 本研究の特長

通常法律書とは全く異なり、Table、Fig (Chart)、Map を多数作成し、読者の理解の助けにした。4つの Mesopotamia 法律間や、それら (4つの code) と日本の法律との比較を行った (比較法制史)。

## 7. 文献

1. 上出健二、金沢工業会誌、p 1-7 (2009)。(参考論文 1)。
2. 上出健二、奈良産業大学「産業と経済」、第 24 巻、第 3, 4 号、p87-136 (2010) (参考論文 2)。
3. 杉 勇：岩波歴史 1、古代 1、p 6、岩波書店 (1969)。
4. Samuel Noah Kramer, 'In the World of Sumer, An Autobiography', Wayne State University Press, 1986.
5. Samuel Noah Kramer, 'The Sumerians ; their History, Culture, and Character,' The University of Chicago Press, 1963.
6. 飯島 紀、'ハンムラビ法典', 国際語学社、2002.
7. 小林 登志子、'シュメール 人類最古の文明'、中公新書、1818、2005.
8. Marc Van De Mieroop, King Hammurabi of Babylon, A Biography, Blackwell Pub., 2004.
9. K. Kamide, Journal of Social Science , Nara Gakuen Univ., vol.18, p 71-108, 2017. [Part 0] 。
10. K. Kamide, Journal of Social Science , Nara Gakuen Univ., vol.11, p113-145, 2014. [Part I] 。
11. K. Kamide, Journal of Social Science , Nara Gakuen Univ., vol.12, p 107-148, 2015. [Part II] 。
12. K. Kamide, Journal of Social Science , Nara Gakuen Univ., vol.13, p 215-293, 2015. [Part III] 。
13. K. Kamide, Journal of Social Science , Nara Gakuen Univ., vol.14, p 251-302, 2016. [Part IV] 。
14. K. Kamide, Journal of Social Science , Nara Gakuen Univ., vol.16, p119-195, 2016. [Part V] 。

15. K. Kamide, Journal of Social Science , Nara Gakuen Univ., vol.17, p 119-195, 2017. [Part VI] .
16. K. Kamide, Journal of Social Science , Nara Gakuen Univ., vol.19, p 37-95, 2018. [Part VII] .
17. K. Kamide, Journal of Social Science , Nara Gakuen Univ., vol.21, p 1-46, 2019. [Part VIII] .